1570309

学位論文審査の要旨

学位申請者	富岡　麻由子 人間発達科学専攻2015年度生	論文題目	親子遊びで親が「遊び手」となること －母親への面接と遊びの観察から－
審査委員	主　　査:　刑部　育子　教授 副　　査:　浜口　順子　教授 副　　査:　松島　のり子　講師 審査委員:　小玉　亮子　教授 審査委員:　辻谷　真知子　助教	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　:　否 「否」の場合の理由 ☐ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む ■ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある ■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている ■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている ☐ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について
学位名称	博　士　(社会科学)		
(英語名)	(Ph. D. in Social Science)		

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、幼児との親子遊びで親が「遊び手」となることに着目し、その経験の様相、遊び手となることの親子の関わりや親自身の生における意義を示すことを主題とする。親子遊びに関する親の経験を扱う従来の研究では、親子関係の垂直性を前提として、子どもの心身の発達・特性と親の信念・育児行動の関連などが検討されており、親にとっての遊びの意義に関心が向けられていないことが課題であった。親側の経験、特に、遊び手としての親への着目は、親子関係の水平性の概念、余暇活動としての親子遊びの理解を進展させ、親子遊びの多義性を示す新たな視座となると考える。そこで、本論文では、親子遊びにおいて、遊び手としての親はどのような経験をするのか、遊び手としての親子はどのように関わるのかを明らかにすることを目的とした。

この目的に迫るため、解釈的アプローチに依拠し、二つの調査で親が遊び手となる事例の分析を行った。調査Ⅰでは幼児の母親8名への面接調査で得た22事例を分析し、母親は親子遊びのなかで新たな発見、認識の刷新、親役割や「大人らしさ」からの解放感、達成感などを経験し、そこに親子遊びのよさを感じていること、母親は遊び手同士としての子どもとの対等な関わり自体を楽しみ、それを希求していることが示された。調査Ⅱでは、5組の母親と幼児の家庭での親子遊びの観察調査で得た事例を分析し、そのうち3事例から遊び手となった母親が多様な心情や要望を率直に表出したり、あえて子どもの遊びの想定から逸れたりすることで、子どもの応答や親子遊びに起伏が生じることが明らかになった。

得られた知見を整理し、親が遊び手となることが親子の関わりや親自身の生においてどのような意義をもち得るかについての考察を三点にまとめた。すなわち、親は遊び手となることで有用性の世界から離れ、自己への尊厳の感覚を高めること、親が子どもが想定する遊びの筋書きからあえて逸れる行為（オフスクリプト行為）によって関わりに生じた起伏が、子どもの側には楽しみの伴う驚き、緊張感を、母親の側には子どもの反応に対する期待感や子どもとわかり合う実感をもたらすこと、親が「率直さ」を示すことは親の内面に対する子どもの理解、母親の子どもに対する自然な共感、母親が本来的な自分でいながら子どもに関わるのを可能にすること、これらが親子遊びで親が遊び手となる意義になり得ると考察した。

本論文は、遊び手としての親の経験や、遊び手同士としての親子の関わりの機微を実際的に示したことで、親子遊びの意義を新たな角度から示した。ただし、協力者の属性の類似性が高かったことなどが方法上の限界となった。同一親子での観察調査と面接調査の実施、戸外の遊びを含めた調査などが、今後研究を進展させていくうえでの課題となると考える。